



青森市内油川の浄満寺にある森山弥七郎供養碑
=2019（令和元）年8月3日筆者撮影

弘前藩庁が「青森」の町づくりを始めてから間もなく400年を迎える。そして、これに尽力したというのが「開港奉行森山弥七郎」であり、彼は「青森開港の恩人」などと評価されてきた。しかし、森山に関しては信頼に足る史料は極めて少なく、例えば、青森の町づくりに関する史料には（信頼性の低い史料も含

めて）「開港」という文言はない。それにもかかわらず、彼は「開港奉行」であり続ける。亡くなったのが1666（寛文6）年2月であるのは「弘前藩庁日記」に記載があるので間違いはない。生年は1573（天正元）年とされ、森山は90歳を超える長寿だった。もちろん、長寿であることを批

判するつもりはない。しかし、90歳目前で「中師派奉行」に就き、現役バリバリで活躍していた。これにはさすがに疑問を抱いてもいいのではないか。

森山弥七郎は1626（寛永3）年4月6日に2代藩主信枚から青森の町立てを命じられた。具体的には移住者を募ることだった。目下、藩主から指示をされたのはこれだけである。

青森の町立てと

森山弥七郎

工藤 大輔

（青森市民図書館
歴史資料室室長）

ただ、「弘前藩庁日記」を丁寧読んでいくと、森山は「外浜に着船する商船の寄港地を青森1か所にす」という指示を、「いつか」は分からないが、やはり信枚から命じられている可能性が出てきた。これが歴史的事実として認められるとすれば、港町青森の町づくりにおいて重要な任務を与えられていたとみられる。この話には続きがある。

商船は青森以外の港にも寄港し、青森は「衰微」したのだという。つまり失敗したのである。これで森山の責任が問われたかどうかは分からない。しかし、おなじ指示が1634（寛永11）年4月6日付で3代藩主信義から、森山ではなく乾四郎兵衛と服部長門守に出されているのは注目できる。この間をどう理解すべきか。

森山家にはどうやら家伝文書があったらしい。藩政時代、この家伝文書により森山弥七郎を語った記録がある。ひとつは1765（明和2）年の今通磨「奥富士物語」であり、もうひとつは1819（文政2）年の序を持つ工藤行一編「封内事実秘苑」である。これらによると、森山が青森の町づくりに関わったのは1624（寛永元）年、もしくは翌25年から26年までの2、3年のことであつた。もちろん、町立ては終わっていない。完了するのは寛文期（1661、73）である。森山家の主張を容れるとすれば、弥七郎は早々にその任から離れていたのである。これがさ

きの「失敗」と結びつくかは定かではない。

もうひとつ、3代藩主信義の時期に森山の姿がみえてこないのである。いや、青森市の歴史叙述でいうと、この時期の青森町の寺社の由緒に絡んで登場することがある。しかし、これらの叙述にはほぼ史料的な根拠がなく、1855（安政2）年の「神社微細・社司由緒調査上帳」によれば多くが信枚期のできごととされる。ちなみに、4代藩主信政の時期になると、「弘前藩庁日記」が始まることもあり、再び森山の行方を追うことができる。しかし、それも1664（寛文4）年11月頃までであるが、（できる限り信頼できる）「史料」というものに縛られて森山弥七郎を論じようとすると、彼の青森の町立てへの関与が、これまで叙述されてきたほど深く、濃いものであつたとは思えないのである。森山弥七郎を地域の「恩人」であるとするならば、ちゃんと根の張った歴史像を構築することこそが「恩返し」になるのではないか。

東京と青森の632号
東京青森人会 2020年12月